

星空のこんにやく

金子 京子

「うちのおとうちゃんは、タヌキです」

先生にあてられたカエちゃんがそう言ったとたん、教室の生徒たちがどっと笑った。

クラスで一番なかよしのアコちゃんも笑っている。

若い女の先生までもこらえきれずに、口を手をあてて笑っていた。

自分の席のところであつたまま、カエちゃんはきよとんとしていた。

（うち、なんかおかしいこと言っただけ？）
しばらくして二年三組の教室の笑いのおうずがようやくおさまった。

顔の表情をきゅつと元にもどした女の先生は、カエちゃんに説明してくれた。

「干支の中に、タヌキなんてないのですよ」（えー、そうやったんかあ・・・！）

その日学校から帰るなり、カエちゃんは台所にいたおかあちゃんの前掛けをひっぱって

うったえた。

「また、だまされた」

「なんのこと？」

「おとうちゃん」

「おとうちゃんが、どうしたん」

「干支の話」

「ああ、あれかいな。あんた、まともに信じ
たんか？」

「おかあちゃんも、わかってたん？」

「いつものことやんか」

「ほんまに、もう・・・」

それは、昨日の夜のことだった。

小学二年生になったカエちゃんは、毎日その日の授業のことを晩ごはんの時に話すのが日課になっていた。

「今日は学校で、なに教わってきたん？」

茶碗を渡しながら聞いてきたおかあちゃんに、カエちゃんは宿題を思い出した。

（そうや。今日は先生に、お家の人の干支を

教えてもらってきなさいって言われたんや」

「お母ちゃんの干支って、なに？」

「干支ねえ。たしか、うちは酉やったかな」

おかあちゃんはカエちゃんの質問にまじめに答えてくれた。

「そしたら、おとうちゃんは？」

カエちゃんは、テーブルの向かいに座っているおとうちゃんにも聞いてみた。

おとうちゃんは、大皿に盛られた鳥のから揚げに箸をのぼそうとしていた。

カエちゃんの質問に、おとうちゃんはおかずをとる手をとめた。

「わしの干支か、えー・とー」

「おとうちゃん、ふざけんといて！」

カエちゃんに言われて、おとうちゃんは、「なんもふざけてへんで」

と言いながら、真剣に考えてみるふりをした。

ほどなくおとうちゃんは答えてくれた。

「わしか。わしの干支はなあ、タヌキや」

「タヌキかあ」

十二支というものを全部知らなかったカエちゃんは、おとうちゃんの言葉をまるごと信じたのだった。

カエちゃんはその夜帰ってきたおとうちゃんに、そのことについて抗議した。

「おとうちゃんのホラふき！」

「おう、ごめん、ごめん。間違えたわ。実はおとうちゃんのほんまの干支はな、キツネやっただわ」

おとうちゃんはそう言って笑っている。

「うそや、うそや。干支にキツネなんかおらへん！」

今度こそはだまされまいと、カエちゃん必死でおとうちゃんに言い返す。

おとうちゃんの言葉を疑ってかかるカエちゃんに、おとうちゃんはこう言った。

「そやったら十二支を全部覚えてそらで言えるぐらいになってみい」

おかげでカエちゃんは、干支を全部覚えるはめになってしまった。

こんな調子で、カエちゃんはおとうちゃんの「ホラ」によくだまされた。

なんでもむきになってしまいうカエちゃんが、おとうちゃんにはからかいがあるらしくて、しよっちゆう「ホラ」をふかれる。

おとうちゃんの「ホラ」でだまされながらも、それでもなんだかとぼけたおとうちゃんだったから、カエちゃんはけっこうおとうちゃんとなかよしだった。

そして、その年の学校の一学期の終わる少し前のことだった。

学校から大急ぎで帰ってきたカエちゃんは、おかあちゃんの姿をさがしていた。

「おかあちゃん、どこ？」

カエちゃんは居間や台所、トイレものぞいてみたが、おかあちゃんはどこにもいない。

「もー、おかあちゃん」

カエちゃんはぶーぶー怒りながら、自分の部屋でよそいきの服に着替えはじめた。

「はよせんと・・・」

カエちゃんは時間にあせっていた。

これから、なかよしのアコちゃんのお誕生会があるからだ。

そんなカエちゃんの部屋へ、なぜかおとうちゃんが入ってきた。

「あれ、おとうちゃんなんで？ 会社における時間とちやうん？」

「おう、ハンコとりにな」

おとうちゃんの経営している小さな会社は家から車で十分のところにあつた。

「おかあちゃん、どこ行つたん？」

「さあて。わしが帰ってきたらおらんかったから、市場へ買い物にでも行つたんとちやうか」

「ほな、おとうちゃんであえわ。お金ちやうだい」

「お金？」

「今日これから、アコちゃんの誕生会があるねん。プレゼント買わなあかんからお金いるんや」

「プレゼント？　いくらや」

「千円」

「千円！　わしそんな大金持ってないぞ」

「なんでーな。ふつう、お誕生会は千円のプレゼントするって、決まってるねん」

「だれが決めたんや。そんなこと」

「だれか、知らんけど、そうなんやねん。とにかく、千円ちようだい」

「おまえ、正月にお年玉ぎよーさんもろて、お金いっぱいもってなかったか？」

「おかあちゃんが貯金しといたるって言うたから、全部おかあちゃんにあずけた」

「そうか、しやあないなあ」

おとうちゃんはカエちゃんの言い分に納得したらしく、ズボンのポケットから黒い革の小銭入れを取り出した。

カエちゃんが早く早くとせかすと、おとう

ちゃんはそこからお金を出してカエちゃんの手に渡した。

カエちゃんの手のひらにのせられたのは、穴のあいた五十円玉が一枚だった。

カエちゃんは、あまりの少なさに驚いた。

「こんだけー？」

「わし、これしかないんや」

「ええー、うそー！ 五十円なんか、なんも買えへん」

「そんなことあるかいな」

「そやかて・・・」

「おとうちゃんかてないもんはないんじや。

それで工夫してみろ。ほなな」

そう言うと、おとうちゃんはすたすたと部屋から出ていってしまった。

部屋に残されたカエちゃんは、着替えながらぶーたれた。

「おとうちゃんの、ケチ・・・」

そんなカエちゃんにおかまいなしに、

「しつかり戸締りして行くんやで」

そう声をかけると、おとうちゃんはさがして
いたハンコを手には会社へと戻っていった。
「そやから、おかあちゃんの方がよかったの
に・・・」

そう言いながらも、カエちゃんには時間が
ない。

早くしないと、お誕生会に遅刻しそうだ。
カエちゃんは、おとうちゃんがくれた五十
円玉をポケットに入れて、外へ出て走った。

（五十円で買えるもの・・・）

到着したのは、小学校の並びにある文房具
屋だ。子どもたちは、学校帰りにここへ立ち
寄って買い物をするのが好きだった。

店のガラス窓のそばには流行りの陶器のキ
ャラクター人形や、かわいい図柄の筆箱が並
んでいる。

そして、そのどれにも五十円では買えない
値段がついている。

（ああいうのをアコちゃんにあげようと思っ
てたのに・・・）

カエちゃんはじつとそれをみつめていたがしばらくするとあきらめて、ほかのものに目を移した。

カエちゃんは五十円玉を握りしめながら、狭い文房具屋の中をぐるぐると見て歩いた。そしてついに、くるくるとした巻き毛のかわいい女の子が描かれた表紙のノートを一冊と、細かい花柄のついた鉛筆を二本手にとつた。

ノート^{※注}は三十円、鉛筆^{※注}は一本十円だから二本で二十円。あわせて五十円だ。(※昭和四十二年当時の値段)

カエちゃんはそれをレジのおばちゃんの手へ持っていった。

「おばちゃん、これお友だちにプレゼントするねん。包んでリボンもかけて」

カエちゃんは勇気をだして、文房具屋のおばちゃんに注文してみた。

「あいよ」

文房具屋のおばちゃんは、にこにことしな

がらうなずいた。

そして、カエちゃんの言うとおりに赤地に白い水玉の包装紙でくるんで、上からピンクのリボンをかけてくれた。

カエちゃんはその包みをおばちゃんから受け取ると、なんだかホツとした。

そして、それを大事にかかえてアコちゃんのお誕生会へと向かっていった。

お誕生会はすでに始まっていて、カエちゃんが最後のお客だったようだ。

アコちゃんは、カエちゃんからのプレゼントを「ありがとう」と言って受け取ると、部屋の窓際に設けられたプレゼントを置くためのテーブルに置いた。

立派なリボンがかけられた四角い箱入りのもの、細長いものや丸い形のもの。そこにはすでに集まっていたお友だちのお誕生日プレゼントが盛りだくさんに積み重ねられている。

その豪華なプレゼントの山の中で、ぽんと上に乗せられたカエちゃんのプレゼントは、

他の子たちのは形が全然違っていたせいかなんだか一番目立っていた。

そして夏休みになって、それから一か月後の夏の終わりの夜だった。

暑かった夏から秋になりかけていたその夜カエちゃんはおとうちゃんと縁側に座ってご飯の後の夕涼みをしていた。

カエちゃんは食後のアイスを食べながら、おとうちゃんは枝豆をおつまみにしてビールを飲んでいた。

満天の星をながめていると、おとうちゃんがふいに言いだした。

「カエ、こんにやくの作り方知ってるか？」

（ほら、きた！）

カエちゃんは以前に干支でだまされたことを思い出した。

けれど、その日のカエちゃんはわざとおとうちやんとぼけてみせた。

「うち知らんわ。おとうちゃん、教えて」

「ほな教えたる、よう聞いときや」

カエちゃんはおとうちゃんが何を言うのかと、にやにやしなから耳をかたむけた。

おとうちゃんは星空を見上げながら朗々と語った。

「今日みたいに晴れた日の夕方にな、まず畑に水を貯めるんや」

カエちゃんは、ふんふんと聞いている。

「それでな、その畑に長い長い竿を差しとくんや」

「竿？」

「そうや、竿や」

「ふうん・・・」

今度は何を言い出すかと待ち構えるカエちゃんに、おとうちゃんはよどみなく話を続けた。

「その竿は長い竿でな、星空まで届く。そしてたらな、夜に星がその竿をつたって一つ、二つと畑に落ちてくるんや」

「ええー！ 星が落ちてくるん！？」

「そうや。ゆーっくりと落ちてくるんや。そ

んで、次の朝にそれを固めたのが、あのこんにやくなんやで」

「へえー・・・！！！」

おとうちゃんの壮大なホラに、カエちゃんは思わず叫んだ。

「どうや、納得したか」

おとうちゃんはカエちゃんの驚きぶりに上機嫌だ。

カエちゃんにはもちろん、おとうちゃんがいつもの「ホラ」で自分をおちよくっているんだらうと察しがついていた。

それでも、その日のカエちゃんはおとうちゃんの話にえらく感動して、なぜかこう答えていた。

「そやから、こんにやくには、あんなぶつぶつの星の模様があるんやね」

「そういうこっちゃ」

夜空から竿をつたって星が落ちてくる。それが畑の水の中に、一つ、二つ・・・。

カエちゃんはアイスを食べながら、うっと

りとその光景を頭の中に思い浮かべた。

（それにしても、ごっついホラやなあ・・・）

カエちゃんはそう思った。

でもそれよりも、その時カエちゃんはそのロマンチックな話がとても気に入った。

カエちゃんは、おとうちゃんのすさまじい想像力に感心し、そんな話をしてくれたことがなんだか嬉しかった。

（おとうちゃんて、変やけどおもしろいなあ）

そう心で思うと、カエちゃんはおとうちゃんの横顔をのぞき見た。

おとうちゃんも、さつきカエちゃんに聞かせた話に自分でえらく満足しているらしく、そばに置いてあったビールをぐいっと飲み干した。

それから八年がたった。

こんな調子のおとうちゃんと、おとうちゃんの話にはまるで動じない現実的なおかあちゃんのもと、カエちゃんも高校二年生になっ

ていた。

それはその年の夏休みだった。

バスケットボール部に入ったカエちゃんの夏は部活でけっこう忙しい。

しかも、通っているのは宿題がたくさん出る高校だった。

だから夏の時間を有効に使おうと、カエちゃんは今前中だけ働けるアルバイトをさがそうと考えた。

カエちゃんのおんなに元気だったおとうちやんが肝臓の病気になって、時々寝込むようになって一年が経っていた。

休みがちなおとうちは、会社の仕事がちよつとうまくいかなかったのを知っていたので、カエちゃんは今部活に必要なバスケットシューズぐらい自分で買おうと思ったのだ。

おとうちやん流のやり方に鍛えられたカエちゃんは、なんでも工夫することができるようになっていた。それでもカエちゃんはまだ高

校二年生。

カエちゃんは新聞をすみからすみまで読むと、高校生でもできて、朝だけ働くという条件にあうアルバイトをようやく探しだした。

電話をかけて面接してなんとか雇ってもらった先は、大阪市中央卸売市場の青果市場、いわゆる「ヤツチャ場」と言われる所の喫茶店だった。

仕事は早朝六時から十時までのウエイトレスだった。

「早朝のアルバイトなんて、起きれるんかいな」

「だいじょうぶ。自分でひとりで起きて行くから気にせんといて」

そうおかあちゃんに宣言すると、その夜カエちゃんは目覚ましをかけていつもより早い時間に床についた。

アルバイトの第一日はすごく緊張していたせいか、カエちゃんは目覚ましが鳴る前に

起きることができた。

朝五時半、カエちゃんは飛び起きるとジーンズとTシャツに着替え、顔だけぴしゃぴしゃと洗って家を飛び出していった。

家からおよそ二十分の青果市場まで自転車をこいでいくのだが、空はまだ明けきらずうっすら暗い。

藍色の空にはまだ星がまたたいていたりする。

（わ、星がいっぱい・・・）

その星をながめながら、カエちゃんは昔おとうちゃんがしてくれたこんにやくの話をつつすら思い出した。

（あの星たちが竿にそって、ツーツて降りてくるんかあ）

十六歳になったカエちゃんだが、ホラだとわかっていてもあの話だけはすてきだな、と思っただけで覚えている。

そんなことを思いながら自転車をこぎながら風にあたっていると気持ちよく、半分眠っ

ている目が夜明けとともに開いてくる。

そしてカエちゃん目が全部聞ききったら
ようやくその「ヤツチャ場」の喫茶店に到着
するのだ。

市場の中のその喫茶店はカウンターが八席
ほどしかない狭い店で、ウエイトレスといっ
ても市場の中に入っているいろいろな青果会
社の事務所へモーニングセットを出前するの
が主な仕事だった。

「玉ねーぎ、和泉の玉ねーぎ」

場内では、その日のセリがわさわさと始ま
っている。

独特な濁声でセリのおじさんが叫ぶと、ツ
バのついた帽子をかぶった仲買人たちが二と
か五とか数字を指で表現する。

「ハイ！ 二百、二百、二百五十」

その動作はすばやく、じっと見てもし
くみがさっぱりわからないぐらいの早業だ。

そして、みるみるうちに野菜の値段が決ま
っていく。

野菜がぎっしり入った木箱を手鍵でひっかけて運ぶ人。

フォークリフトのハンドルをぐいぐい操作している人。

怖い形相で働くヤツチャ場の人たちは、みんな気忙しく、言葉使いが荒い。

威勢のいい声が飛び交う中、殺気だっている男の人たちの間を分け入っていくのはカエちゃんには恐ろしく、すこし勇気がいった。

「そこ！ 邪魔、邪魔」

容赦ない叱責に、初めて広い構内をうろろろするカエちゃんはおっかなびつくりだ。

なんとか注文先の場所を探しあて出前を届けて店に戻ると、喫茶店の狭いカウンターは休憩に入った仲買人たちですでにいっぱいになっていました。

「おれホット」

「こっちはレーコー（アイスコーヒー）」

「わしはコールミーコー（アイスオーレ）」

それぞれの注文が出されると、みんなゆっ

くり一口めを味わうように口に含む。

そして、ひと息つく、「どこの高校や」とか「どっから来たんや」とか「朝早よう、えらいな」と声をかけてきた。

その顔はさっきまでの仕事中の殺気だった表情ではなく、ふつうのとぼけたおじさんの顔だった。

（このおっちゃんら、なんかうちのおとうちやんに似てる）

そう思ったカエちゃんは、さっきまでの怖かったヤツチャ場のおじさんのことがすっかり恐ろしくなくなっていた。

こうしてカエちゃんは、アルバイト第一日目を無事に終えることができた。

（なんとか続けられそうかな）

カエちゃんはホッしながら、すっかり陽がのぼって暑くなった場外を、自転車をこいで家路に向かった。

それでも、朝は高校生にとってはとにかく

眠い。

冬に比べれば夏の朝なんて楽勝だとは思っていたけれど、カエちゃんにとって朝起きるのは至難の業だ。

でも一度始めたことだ。カエちゃんはこのアルバイトは絶対やり遂げるんだと、毎朝がんばって一人で起きて「ヤツチャ場」へ通った。

そして、それはアルバイトを始めて五日目の朝だった。

カエちゃんが目をこすりながら二階から降りてくると、いつもは奥の部屋で寝ているはずのおとうちゃんが一階の台所でお湯を沸かしていた。

「あれ？ おとうちゃん、どうしたん？」

「おう、なんや眠れんから起きることにしたわ」

「そうなん」

それだけの会話を交わして、カエちゃんは自転車に乗って出かけて行った。

ところが、次の朝カエちゃんが階下へ降りてくると、おとうちゃんが台所のテーブルに座って新聞を広げている。

「今日も早いね」

「おう、なんや為替のニュースが気になつてな」

それしか言わないで、おとうちゃんは新聞を読みふけている。

カエちゃんにとっては、おとうちゃんの相手をするより、とにかく「ヤツチャ場」へ向かうことが先決だ。

「行つてきます」

そう言うと、カエちゃんは自転車をおして外に飛び出していった。

そんなカエちゃんがこんにやくいもの存在を知ったのは、その「ヤツチャ場」でのバイトの最中だった。

「これ何ですか？」

出前の途中で、親しくなつたお店のお客さ

んの持ち場を通った時に、カエちゃんは黒くて茶色のごつごつした石のような形のものを指さして聞いた。

「ああ、これはこんにやくいもや」

「こんにやくいも？　こんにやくって、おいもなんですか？」

「そやで」

「こんなすごい形から、あのつるつるのこんにやくができるんですか？」

「そやで。知らんかったんか」

「・・・はい。でも、どうやって作るんですか？」

「これの皮をむいて細かく切ってな、それから水と一緒にミキサーにかけてそれを器に入れてねばりが出るまでかきまぜるんや。それで最後にカルシウムを入れて、熱湯の中に入れてゆがくんや。家でやってみるか？」

（へえ、そうだったんや・・・！）

カエちゃんは、おっちゃんが「これ持っていくか」とこんにやくいもをすすめるのも聞

こえず、呆然とその場を後にしていた。

今の今まで、なぜかこんにやくのことだけはおとうちゃんの話に酔いしれて、その実態を調べようとしなかった自分に気がついてカエちゃんは放心してしまったのだ。

いつも関東だきに入っているこんにやく。お箸でつかむと、つるりとすべって逃げてしまちなめらかな表面。

それが、もともとはあんなごつごつとした形をしていたんだと、その日初めて知ったカエちゃんだった。

しばらくして落ち着いたカエちゃんは、頭の中で事実を冷静にかみしめた。

（なんや、そうやったんか）

カエちゃんは長いことおとうちゃんの話の魔法にかかっていた自分がおかしくて、ちよつと苦笑いした。

そしてカエちゃんは、その夏休みが終わるまで遅刻することなく喫茶店のバイトに通っ

て最後の日に無事にアルバイト代をもらうことができた。

もらったばかりのアルバイト代の入った袋を大切にポシエットに入れて、それをななめがけにしたカエちゃんは、颯爽と自転車をこぎだした。

その時は、なんとも言えない解放感と達成感で、心に羽がはえたような気分だった。

「やったー！」
顔に風があたる。

その風のおいで、カエちゃんには季節が夏から秋に変わりかけたのがわかった。

ふと道端に目をやると、そこはネギが刈り取られた後の畑だった。

それを見ていると、カエちゃんは再びこんにやくのことを思い出した。

今のカエちゃんは、もう正しいこんにやくの作り方を知っている。

それでも、やっぱりおとうちゃんの説が好きだな、と思った。

晴れた夜、ここに水を貯めて空まで届く竿をさしたら、ほんとうに星がそこをつたって落ちてくるかもしれない、と空想してみた。

そして、それと同時に最近のおとうちゃんはやせた顔を思い浮かべた。

カエちゃんにはわかっていた。

カエちゃんがアルバイトに寝過ぎさないように、毎朝おとうちゃんが一緒に起きてくれていたことを。

そして、おとうちゃんがいつものホラをふきながら、そっとカエちゃんのすることを見守ってくれていたことを。

だからカエちゃんはこの夏、あの「ヤツチヤ場」の強烈な雰囲気にもめげず、一日も休むことなくアルバイトを続けることができたんだと思った。

（おとうちゃん、ありがとうな。早く元気になっつてな。カエもがんばるし）

カエちゃんは秋の風を頬にうけ、髪をなびかせて自転車をこぎこぎ、家へと帰って行っ

た。
。

(
お
わ
り
)